

## 「放浪記」論:その基礎的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 英一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7343">http://hdl.handle.net/2297/7343</a>

## 『放浪記』論

## —その基礎的研究—

森 英 一

## 第一章 成立と本文異同

## 第二章 なぜ読まれたか——女給小説として——

## 第三章 なぜ読まれたか——奔放な性表現——

## 第四章 なぜ読まれたか——故郷と母——

## 第五章 なぜ読まれたか——文章の魅力——

## 第一章 成立と本文異同

林芙美子の『放浪記』は彼女の代表作であるだけでなく、昭和文学をも代表する作品とみなされている。にもかかわらず、書誌的記述に誤まりがあったり、本文の異同にかかわる叙述に配慮が足りなかったり等々基礎的調査が従来不十分であったように思われるし、その魅力についても十二分に語られなかったように感ずる。以下、調査できた範囲内での報告をしたい。

林芙美子は『放浪記』について何度か回想しているが、たとえばこのような文章がある。

(一) この「放浪記」は十八歳頃から、二十二、三歳頃までの日記をとびとびにまとめてみたので、働いてゐた私は、日記の形式とか、詩のやうな形式のものしか書けなかつた（「はしがき」昭14・11『放浪記—決定版—』新潮社）。

(二) 私はこの頃、十五、六歳の折に非常な速度で書物を乱読した（中略）。西洋のものではクヌウト・ハムズンの「飢ゑ」と云ふ小説を読んで感激したものであつた（「あとがき」昭24・2『林芙美子文庫・放浪記I』新潮社）。

(三) 此放浪記を書き始めた動機は、ハムズンの「飢ゑ」といふ小説を読んでからである。作家になるなどとは思ひもよらない事だつたが、とりとめもない心の独白を書いてゐるうちに、私は次々に書きたい思ひにかられ、書いてゐる時が、私の賑やかな時であつた（「あとがき」昭24・12『林芙美子文庫・放浪記II』新潮社）。

後述のように、この資料(一)～(三)のそれぞれに問題点があるが、三者を総合すると原「放浪記」の成立事情がほぼ推測できる。つまり、原「放浪記」は北欧のノーベル賞作家クヌウト・ハンズンの代表作『飢ゑの世』に触発されて執筆されたこと、当時働いていた彼女は日記形式の短かいものしか書けなかつたこと等を

りうる。ハンスンの『飢ゑ』は芙美子十八歳の大正十年に、宮原晃一郎が新潮社から『泰西最新文芸叢書』として刊行しているが（従って、(二)にいう十五、六歳に読んだというのは記憶違い）、(一)と(三)の内容から推察すると、彼女が読んだという本はこれ以外にも三上於菟吉訳の『飢餓』（大13進文社）か宮原晃一郎訳の『飢ゑ』（昭3新潮社『世界文学全集』のうち）に拠ったと考へるのが妥当であろう。

大正十一年四月に上京した彼女は職を転々とし、初恋の（島の男）と別れた苦しさや貧窮に耐えつつ、ノート類に詩や原「放浪記」を書きつける。従って、まだ尾道在任中の十八歳頃も含む(一)の記述は正確を欠いており、平林たい子が『放浪記』は、私が知合った大正十三年ころすでに歌日記という題でかきためていた（昭44・7『林芙美子』新潮社）と回想する大正十三年頃を一、二年溯る程度であろう。また、原「放浪記」の執筆に『飢ゑ』が参与して、『放浪記』の完成に一役買ったとしても、どの程度のものであったのか。回想に現われない石川啄木や『伊勢物語』等の関係をよく重視したい。

ともあれ、そのようにして書きためられていたノートの原「放浪記」がどんな経過を経て活字になったのか、この間の事情についてもまず若干の資料を紹介することから始めよう。

(四) 「放浪記」は神戸雄一さんの主宰してゐた詩の雑誌について載せてゐたが、途中、三上於菟吉さんのすいせんで、長谷川時雨さんの創刊した女人芸術に五六回載せて貰つた（林芙美子「昭和初頭の頃」昭26・7『文学界』）。

(五) 読売新聞の文化部にながくつとめていた林襄二氏が、芙美子さんのフランス行き送別会で言明した所によると、「放浪記」は、その頃文化部の机の抽斗の中にあつた。ところが、長谷川時雨女史が夫君三上於菟吉氏の援助によつて「女人芸術」を発刊したとき、三上氏がその原稿の話をきいて興味を

もつたので、芙美子さんは、それを読売から取戻して、女人芸術社にもつて行つた。三上氏は非常に愛読して、早速「女人芸術」二号から連載してセンセーションを起した。同誌には五、六回つづけた（平村たい子・前掲書）。

(六) サブタイトルに「放浪記」とつけたのは三上であつた。これは、私が三上自身から聞いたことだから、信じてよい（和田芳恵「林芙美子とその時代」昭49・6『現代日本文学アルバム13林芙美子』学習研究社）。

(四)に拠ると「放浪記」は最初神戸雄一の主宰詩誌に載つたということだが、どれをさすのか今のところ不詳である。大正十三年七月に芙美子が友谷静栄と刊行したりーフレット型の同人詩誌『二人』のスポンサーが神戸であり、『ダムダム』の同人でもあつた彼は当時、東洋大学の学生であつた。平林たい子編の「年譜」（昭39・7『日本の文学47』中央公論社）に拠れば、田辺若男と別れた芙美子が次に同棲した相手と目されている人物である。その神戸を名ざして挙げている以上、(四)はかなりの信憑性がおける記述ではある。しかし、初刊の改造社版『放浪記』が全て『女人芸術』掲載のものであることから察するに、絶対的とはいえない。新資料の出現を待ちたい。

おそらく、昭和三年七月に生田花世に連れられて『女人芸術』社を訪ねた芙美子は、主宰の長谷川時雨に詩「黎畑」をみせた（尾形明子「女人芸術の世界」昭55・10ドメス出版）。それは八月号の『女人芸術』に掲載された。それを読んだ時雨の夫であり『女人芸術』のスポンサーでもあつた三上於菟吉は感心した。前後して、(五)にあるように新聞社に持ち込まれていた原稿の話を耳にした三上はそれを『女人芸術』に連載させることとし、サブタイトルを「放浪記」と命名した(六)。こうして、昭和三年十月一日発行の第一巻第四号の同誌に「秋が来たんだー放浪記ー」が載り、のち全二十

回にわたって五年十月号の「女アパッシュー放浪記」に至るまで連載されることになる。この間「改造」に「九州炭坑街放浪記」が採られ(昭4・10)、これは改造社版『放浪記』の(放浪記以前)の章となった。この間の事情は次の回想にくわしい。

(七) 私は、当時交際中であつた妻に、昭和の青踏派ともいふべき、新鮮な婦人雑誌が生まれたとして送つていたところ、連載中の「放浪記」を是非よんでみてくれとバックナンバーを送りかえてきた(中略)。こいつはいけるぞと思つたので、いつか編集会議に持ちだそうと考へたが、なかなかふんぎりがつかない(中略)。私は「九州炭坑街放浪記」と題をきめ、おそれるおそれる会議に提案したのである。(水島治男『改造社の時代・戦前編』昭51・5図書出版社)。

『女人芸術』連載の「放浪記」の評判はよく、それまで無名の芙美子にも他の雑誌や新聞から注文が来るようになったが、彼女の文名を決定的にしたのは、何といつても『放浪記』を単行本にしてからである。単行本に際して彼女は、

(八) 此放浪記は安妥と出版されたものではないだけに、私にとつては思ひ出深いものである。改造では二年間ストックにされてゐたし、中央公論では一年半ほどストックになつてゐたのだから、長い道順を経て発表された(三)に同じ)。

と述べているが、昭和三年十月の掲載開始から昭和五年七月刊行までの期間を勘案すると、誇張表現に近いようである。むしろ水島治男が次で語る方が事実を伝えていると判断できる。

(九) ちよつどそのころ社の出版部では「新鋭文学叢書」一冊三十銭のシリーズもの企画が進行中で、林芙美子の「放浪記」を飛び入り式に加えたいとの提案があり、山本改造が「この叢書に取り入れるのはまだ早くはないか」と私に相談にきたので、名案である、ぜひ加えたいと答えておいた。これは図

星であつた(中略)。彼女の内輪話によれば、『女人芸術』に連載した切り抜きをまとめて、徳田秋声にあずけて読んでもらつた。そして秋声の推薦によつて新潮社に持ち込んであずけつたにせよしてあつたのを、とりもどしてきたのだといふ(七)に同じ)。

昭和五年七月三日発行の奥付をもつ『放浪記』は以上のような経緯をたどつて誕生した。それは出版社も予期せぬ反響をよんだので、同年十一月十日、『続放浪記』の刊行となつた。正統の二冊にはそれぞれ小見出しがつけられている。今、煩雑かも知れないが、それらを全て示し、同時に初出誌の判明している分についてはそれを記す。

放浪記以前一序にかへて(昭4・10原題「九州炭坑街放浪記」改造)

淫売婦と飯屋(昭5・6『女人芸術』三の六 但し原題には副題「放浪記」がつく。以下同様)

裸になつて(昭5・4『女人芸術』三の四)

目標を消す(昭4・12同右 二の十二)

百面相(昭4・2同右 二の二)

赤いスリッパ(昭4・4同右 二の四)

粗忽者の涙(昭4・5同右 二の五)

雷雨(昭5・7同右 三の七)

秋が来たんだ(昭3・10同右 一の四)

濁り酒(昭3・11同右 一の五)

一人旅(昭3・12同右 一の六)

古創(昭4・1同右 二の二)

女の吸殻(昭4・6同右 二の六)

秋の脣(昭4・11 同右 二の十一但し、初出では脣は唇)

下谷の家(昭4・7 同右 二の七)

(以上 正篇)

恋日

茅場町

三白草の花(昭4・9 『女人芸術』二の九)

女アパツシユ(昭5・10 同右 三の十)

八ツ山ホテル

海の祭(昭5・8 『女人芸術』三の八)

旅の古里(昭5・5 同右 三の五)

港町での旅愁

夜の曲

赤い放浪記

酒屋の二階(昭4・8 『女人芸術』二の八)

寝床のない女(昭5・9 同右 三の九)

自殺前

放浪記以後の認識(刊行時の書きおろし)

(以上 続篇)

以上の配列をみると、必ずしも『女人芸術』での発表順にはなっていない。この点について芙美子は「赤いスリッパ」初出本文で日記が転々と飛びますが、その月の雑誌にしつくりしたものを抜いて書いてをりますので、後日、一冊の本にする時もありましたならば、順序よくまとめて出したいと思っております。

と付記しているが、これを信ずるとするならば、単行本は単純に年月順に並べかえただけと判断できる。しかし、後に述べるように、年月順を無視した意図的配列も一部に存在するようである。

さて、正統を合本した形で昭和八年五月に改造社から文庫版が出たあと、『林芙美子選集』の第五巻として『放浪記』が刊行された(昭12・6)。その際、続篇の最終章「放浪記以後の認識」の次に、  
 へ林芙美子と云ふ名前は、少々私には苦しいものになつて来まし

た。甘くて根気がなくて淋しがりやで。以下、(静かな観照、素材の純化、孤独な地域、この様な作品を長年憶つてゐます。そして私の反省は死ぬまで私を苦しめることでせう)に至る部分が新たにつけ加えられた。昭和十四年十一月、芙美子は『放浪記——決定版——』を新潮社から刊行した。改造社版の時点よりすでに十年の歳月が流れようとしている。その「はしがき」に語るように「放浪記」時代と異なつてへ食べることに不自由をしなくなつたし、好きな旅行をすることも自由)となつた彼女である。押しも押されぬ流行作家となつた彼女がこの作品を現在の眼からみてへ不備だつた処を思ひきり、書き直したのがこの決定版である。

これも後述の予定だが、作者自身による改訂は別作品かと見間違うほど多彩多岐にわたつている。のみならず、この決定版本文が以後の流布本の本文となるところに作品評価の困難さを伴う。つまり、正統の『放浪記』はもちろん多くの読者を獲得したのだが、決定版の本文による以後の『放浪記』も多数の読者を得ているわけで、異種の作品とも思われる大巾な異同を持つ両『放浪記』では読者の感動が異質なもののなか、あるいはそこに共通性が発見できるのかという問題が生じてくる。それは『放浪記』の作品素材が持つ普遍性が作品本文の異同をも意に介しないものなのかどうかということでもある。

ところで、昭和二十二年五月、『日本小説』の創刊号に「肺が歌ふ——放浪記第三部——」が掲載された。その「まえがき」に次のように記されている。

(+) 昭和五年に、改造社から、新鋭そう書とし、私の放浪記・

続放浪記が処女出版として出た。当時、この放浪記は全部発表出来たら四冊位のものにはなつただけけれども、自由に発表すると云ふ事はむづかしい時代だつたので、発表出来る程度のもを二冊にまとめて出した。二十年近くも立つて、発

表出来なかつた昔の日記を取り出してみると、もう落葉の如く黄ばみ、文字もなぐりがきで、意味をなさないところもある(中略)。意味のわかりづらいところなど、少々加筆して発表したいと思ふ。

つまり、「肺が歌ふ」の一節へ下層階級のはきだめ 天皇階下は狂つておいでになるさうだ 患つてゐるものみの東京〜等、戦前ではとても活字にすることが不可能な字句を含むような日記を戦後、加筆の上公表したわけである。それは雑誌の編集長・和田芳恵の仲介に拠つた。同誌掲載最終の「新伊勢物語」の末尾に〈未完〉とある上、単行本の「あとがき」(昭24・1留女書店)にもへまだ、この後一年位は日本小説に続けたいと思つてゐる」と記されているのにもかかわらず、昭和二十六年六月、芙美子の死によつてその機会は消失してしまつた。

第三部単行本にも次のような見出しがある。(一)内は『日本小説』の発表年月と巻号を示す。

- 肺が歌ふ(昭22・5 一の一)
  - 十字星(昭22・7 一の二)
  - 第七初音館(昭22・9 一の三)
  - 泣く女(昭22・11 一の四)
  - 冬の朝顔(昭23・1 二の一)
  - 酒眼鏡(昭23・3 二の三)
  - パレルモの雪(昭23・4 二の四)
  - 土中の硝子(昭23・5 二の五)
  - 神様と糠(昭23・6 二の六)
  - 西片町(昭23・8 二の七)
  - ガラテヤ(昭23・9 二の八)
- 二十四年十二月、新潮社から刊行中の『林芙美子文庫』に『放浪記II』として第三部が収録された。これは留女書店刊分につけ

加えて、『日本小説』二十三年十月号(二の九)に掲載の「新伊勢物語」、さらには未発表と思われる(八月×日)高架線の下をくぐる。響々と汽車が北へ走つてゆく以下(裸のへその上)のせてみたり、仲良く遊んでくれる二銭銅貨よに至るまでの本文をも附した。

ほぼ以上のような経過を辿つて現在みる事ができる『放浪記』全三部は、昭和二十五年六月に中央公論社より刊行されたのである。新潮文庫収録の『新版 放浪記』(昭54・9)はこれと同一本文である(もつともこの際、各章の見出しはカットされた)。

先に初刊本である改造社版の正統『放浪記』(第一、二部)と昭和十四年刊行の決定版『放浪記』以降とは本文にかなりの異同があると述べた。別作品かと思間違ふほど多彩多岐にわたると述べた。私は作品の内容とマッチした本文としては改訂以前の改造社版を採る。なお、初出誌が判明している分については、それと単行本との間にも異同が生じるのだが、ほとんど問題とするに足りない。ここでは除外する。なぜ改造社版を採るか、その理由をまず主な異同の特色を記すことから始めよう。

<p>①</p> <p>初刊本においてオノマトペがはるかに多い。</p>	<p>主な異同の特色</p>
<p>20 勝手口を開けてみると、錆びた鐘詰のかんからがゴロゴロ散らかつていて、座敷の畳が泥で汚れていた。昼間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもここにもたたずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。</p>	<p>異同例 (冒頭の算用数字は新潮文庫本の頁を示す。傍線の横に付した字句は改造社版本文)</p>

	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
再刊本の「〜と思う」の言	再刊本の 「〜してみる(た)」 「〜ている(た)」 等は初刊本にほとんどみられない。	初刊本の「お母さん」は再刊本では「母」。	初刊本では格助詞が少ない。	初刊本は現在形止めがはるかに多い。	初刊本は文末の体言止めが多い。	口語的表現が初刊本に多い。	片仮名書きが初刊本により多い。
32 何とかして買ひたいものだと思う。	21 私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いてみた。	40 お母さんのたより一通 母の音信一通。	69 裏の丘へたけのこ(を)盗みに出掛け て行った。 85 「私は、これでも子供を二人も産んだ のよ。」	88 広い食堂 <small>ホール</small> の中を片づけてしまつて初めて自分の体になつたような気がした。 161 島で母達と別れると、私は磯づたいに男の村へ行った。	74 今夜は太子堂のおまつりで、家の縁側から……	37 私は毎日玩具のセルロイドの色塗り(に通つている)。 31 仲々大変なことなので汚れた壁の黒板には	31 汚れた壁の黒板には

⑫	⑪	⑩	⑨
初刊本では改行がおびただしく一センテンスがより短い。	再刊本の「〜けれど」「けれど」は初刊本では「〜(だ)が」となる場合が多い。	再刊本に顕著な、文末の「なり」は初刊本では、ほとんどみられない。	い方は初刊本ではあまりない。
64 だ <small>た</small> けど所詮はどこへ行つても淋しい一人身(なり)。	36 私にも母にも縁のないお祖母さん <small>だ</small> けれど	32 昨日まで、元気にミシンのペダルを押ししていた安さん夫婦を想い出す(なり)。 55 新らしい土地へ降りてみたいな(と思ふなり)。	45 松田さんが妙に大きいセキをしながら窓の下を通つたとおもうと、

以上の特色を総じて、初刊本の口語的表現がより説明的表現へと改変されているといえよう(⑩のような例外もあるが)。それは『放浪記』がそもそもノート類に書きつけた日記を原型にすることと深く関係する。つまり、他者にみられることを意識しない以上、極端にいえば本人だけに通用する単語や符号の羅列でも十分用をなすわけである。説明を要しないのである。⑫の特色は『放浪記』が詩をかなり引用しているということと関係するかもしれない。引用された詩と本文との一体感が読者には頁を開いた瞬間に感じとられよう。また、①②の特色は元来美英子がダダイズム系の詩人と交わり、自らも詩人として出発したこととかかわりがある。⑦については彼女が『放浪記』は、別れてゐる母へ送る手紙のやうなものだとも云へるであらう(「はしがき」『放浪記』決定版)と述べるように、作品のテーマにかかわる異同である。第四章に詳述する。

このように初刊本はノート類の日記により近い形を示しており、その分だけ当時の人間林芙美子が生き生きと描出されている。決定版では説明不足の描写は整えられたが、逆に初刊本で躍如としていた生の彼女ははるかに後退してしまう。このことは次のような異同を観るとより明白になる。

65	112	26
<p>何もう男に迷うこと<small>放浪ける</small>は恐ろしいのだ。  <small>奴</small>男に放浪し職業に放浪する私      何も満足に出来ない私である。ああ全く(考えてみれば)、頭が痛くなる話だ。</p>	<p>せめて手を握る事によってこの青年の胸が癒されるならば……私  <small>放浪ける</small>はもう男に迷うこと<small>恐ろしい</small>は恐ろしいのだ。  <small>奴</small>男に放浪し職業に放浪する私</p>	<p>目当もないのに東京でまごついていたらとところで結局はどうにもならないと思う。  <small>ウロウロ(裏面)に放浪した</small>  <small>私</small>長い事東京に放浪して、東京に疲れて帰ってきた私にも昔のたどたどしい恋文……</p>

これらの異同の場合はタイトル『放浪記』の意味するところとも深い関連がある。主人公があてどもなく職を転々と変えては生活の苦勞をする、この苦勞に耐えかねて時には母のいる故郷に無けなしの金をはたいて旅行をし、心の充電をする。そのような姿を描くのがまさに「放浪」なのだ。初刊本はこの「放浪」という言葉そのものがダイレクトに使用されているのみならず、「放浪」の意味は「男に放浪」することでもある、と明言されている。生と性の「放浪」がまさしく『放浪記』のテーマであることが初刊本では明確に提示されている。再刊本はダイレクトな表現を避け、てしまい、主人公のイメージを希薄にする方向を指示している。

この点にも初刊本を採る理由がある。生と性の「放浪」が繰り返し表現されながら、作品世界はそんなに暗い雰囲気濃厚にしていない。理由は種々挙げられよう。主人公の楽天的性格もその一つと思われる。しかし、最大の理由

は彼女に「物を書き、読む慰み」、換言すれば「文学に執着する心」が強く存在していたことではなかったか。そのことがともすれば墮落しがちな彼女を救い、作品世界に向日性を付与する。それは初刊本に拠ると顕著なのであり、再刊本ではボカされた表現になっ

271	121	105	88	88	87	86	79
<p>拒絶がなくても、二人で蒲団にはいつていると、平和な気持ちになつてくる。いいものを書きましよう、努力しましよう……。</p>	<p>ああ誰もいないところで、ワァッノと叫びあがりたいほど焦々する<small>焦々する</small>。  <small>い</small>時をかか、<small>花</small>気な詩をかかう。</p>	<p>かぶり(を)して歩きたくなつてくる。</p>	<p>皆淋しいお山の閑古鳥<small>(た)</small>うすら寒い秋の風が蚊帳の裾を吹いた。  <small>い</small>は、<small>い</small>のものが書きたい、<small>年</small>をとる事はいいじゃないの。酒に酔いつぶれて  <small>見返す</small>いる自分をふいと反省すると、大道の猿芝居じやないけれど全く頼  <small>か</small>かぶり(を)して歩きたくなつてくる。</p>	<p>広い食堂の中を片づけてしまつて初めて自分の体になつたような気がした。真実にどうかにかか書きたい何か読みたい。ひやひやした</p>	<p>……。落ちついてみたいものなり。  <small>小説や詩が書きたい</small></p>	<p>何の条件もなく、一月月三十四もくれる人があつたら、私は満々としたい生活が出来たらうと思つた。  <small>詩を書いてみたい</small>いい小説を書きたい。</p>	<p>働くこと云う事を辛いと思つた事は(一度も)ないけれど、今日こそ今こそ字がなつかしい。  <small>今</small>安さがほしいと思う。</p>

以上が初刊本と決定版以降の再刊本との本文異同の特色のあらましである。初刊本は再刊本と比較して表現が稚拙で、不十分な部分を含む。矛盾する表現内容も多い(例として次のような箇所がある。180私は堤の上の水道のそばに、米(の風呂敷)を投げるようにおろすと、そこへごろりと横になつた。涙かにじんできて

仕方がない。作者の若さゆえのセンチが鼻につく。しかし、これらの欠点を超えてなお、主人公のひいては作者の〈生と性〉と対決する真摯な姿が読者の胸を打つ。そこに『放浪記』の時代を越えた普遍性が存在するのであろう。

ほぼ十年後に作者自身がそういう短所や欠点を可能な限り排除しようとして作品に手を加えた。その結果、確かに読みやすくなつた。しかし、〈生と性〉に立ちむかう主人公の像はかなり不鮮明になつてしまつた。初刊本（改造社版）を採る所以である。

## 第二章 なぜ読まれたか——女給小説として——

「序にかへて」の副題を持つ第一章「放浪記以前」を読んだ読者は予備知識を与えられる。〈私〉は八歳で母と共に家を出、義父に連れられて木賃宿を転々と渡り歩き、旅を古里とし、宿命的に放浪者であると認識していることを、この章を〈あれから拾何年、今だに私は人生の放浪者である〉と結ぶ作者は、次章「淫売婦と飯屋」の冒頭に啄木の歌〈さいはての駅に下りたち雪あかり……〉を置き、以後の〈私〉の行先を暗示する。事実、〈私〉は女中をしていた近松秋江宅から暇を出されるが、二円をもらっただけで、行くあてもなく途方にくれる。新宿旭町の木賃宿に落ちつく彼女が職業紹介所にも出かけるが、職を得ることは困難である。

彼女は時に、〈国へ帰りたい〉〈死ぬ事を考える〉〈男の人にすがりたい〉等々現実生活からの逃避を考えるが、〈何とかなるだろう〉との楽天性を底に持ちあわせているため、結局は〈当ってくだけてみよう〉と決して悲観しない。困難な現状との戦闘を開始しようとする。

彼女は様々な職業を経験する。まず第三章「裸になつて」では母親と同居しながら露天商を営み、四章「目標を消す」ではセルロ

イド工場の女工をする。またこの章では〈前のようにカフェーに逆もどりでもしようか〉とあり、カフェー女給の経験も紹介している。以下、牛屋の女中（五章「百面相」）カフェー女給（八、十、十三、十四、十五章）、食堂女給（九章）毛布問屋事務員（十二章）をそれぞれ経験する。なお第二部では株屋店員（十七章）産婦助手（十九章）貿易店店員（二十一章）新聞記者（二十二章）カフェー女給（二十三、二十四、二十五、二十六章）を経、第三部では露天商（三十一章）牛屋女中（三十四章）カフェー女給（三十六、三十七章）広告受付（三十八章）大学教師宅女中（三十九章）帯封書書き（四十一章）という具合である。

これら十数回も転業し歩くというのはこれといった伝もなく都会に出て来た女が生きるための必然だった。彼女にとつて「ペバナナに鰻、豚カツに密柑、思いきりこんなものが食べてみたい」というのが、その時のほかない願望であった。「放浪記」が連載中の昭和初頭は職業を持つ女性、いわゆる職業婦人が次第に職場へ滲透して来ていた。この現象は関東大震災後からのものだが、しかし、女性の場合、日給制が殆んどで月給制は少なく、給料も男子の二分の一か三分の二というのが普通であった。バス車掌、タイピスト、理髪師、写真師、電話交換手、ガソリンスタンド店員等、その職種は従来の女工や女中、飲食店従業員等以外にも拡大されていた。特にサラリーマン相手の新娯楽場であるカフェーの女給は不景気になればなるほど手つとり早くつける新職業としてブルームを呼ぶほどであった。広津和郎が小説「女給」を連載し始めたのは「放浪記」初刊本刊行の二月前である。その映画主題歌「女給の唄」（詞・西条八十、曲・塩尻精八）は夜の酒場に流れた。

一 わたしや夜咲く酒場の花よ

赤い口紅 錦紗の袂

ネオン・ライトで浮かれて踊り

さめてさみしい涙花  
三 弱い女をだまして捨てて

それがはかない男の手柄  
女いとしやただ諦めて

辛い浮世に赤く咲く

カフエーは「東京行進曲」(昭4・5)でもへ変る新宿あの武蔵野の／月もデパートの屋根に出る」と歌われたように、新宿方面が盛んであった。当時、鶴沼直も「浅草が「田舎」になり、銀座が「古典化されつつ」あるなやましい姿を眺めた瞳を、新宿に移す時、ここにはじめて新時代のあらゆる形式上と感覚を見ることが出来る」へさすがに、新宿を、しかも新宿らしく彩るものはカフエーである(『新宿風土記』昭5・9『風俗雑誌』)と述べていた。『放浪記』において神田錦町の食堂に働く「私」が、よりよい給料を求めて新宿へと夜逃げするのは(九章「秋が来たんだ」)、そのような背景があったのだ。<sup>注(3)</sup>

しかし、このように各職場に女性が進出するようになっても概して職業婦人は蔑視されていた。朝日新聞経済部編の『商売うらおもて』(大14・10初版 昭2・4、12版日本評論社)は「性問題を除外したら女の職業は問題になりません」へ女工と下女のほかはどちらを向いても就職難のけふこのごろ、イエスとノーとはこの種の職業婦人の生活を翌日から支配します」と述べて、その辺の事情を暗示している。性的にアナーキーな人間が決して多くなかった戦前、とかく職業婦人は誘惑の多い立場にあり、また、身に覚えがなくとも周囲からは誤解と偏見により、そのようにみられた。

『放浪記』に戻っていえば、「私」が就いた職業は事務員、新聞記者を除いて他は殆んど女工か飲食店員、カフエー女給という具合である。前記『商売うらおもて』にいう「女工と下女のほかはどちらを向いても就職難」の時代であったことを示す。給金につい

てはセルロイド工場の日給は七十五銭とあるが、これは当時の平均的賃金である。カフエー女給に関する賃金は明記されていないが、九章や十五章にあるように客からの貰いに期待をかけることの方が多かった。

ところで、彼女は職を探す方法として街頭のピラをみたり新聞の広告欄をながめる以外に、公立の職業紹介所の門をくぐったり(二、十二章)、派出婦会を訪れたりする(三章)。大久保百人町のゆりのやという派出婦会からは薬学助手の仕事を授かることになるが、この派出婦は当時女性の新職業として固定しつつあったもので、先の『商売うらおもて』続篇(大15・3初刊)にも一項目として挙げられる。

このようにみてくると、『放浪記』は職業婦人である「私」の職業遍歴を描いた作品とみる事が可能である。特に紙幅からいってもカフエー女給に至るまでの遍歴を描いたものともみられる。職業婦人が社会的にも話題の対象となっていた当時、その内実を記した『放浪記』が多数の読者を獲得した理由はこの辺にもあるのではないか。折から大衆文学隆盛へ向けての上昇期でもあり、『放浪記』をかかる関心と好奇心から手に取ってみた読者も多分、数多かったはずである。当時、中原中也や大岡昇年と交際していた文学青年古谷綱式もその一人であった。

当時のぼくたちが、若い女にもっとも自由に接することができたのは、カフエーの女給であった。ぼくもすでに、そのカフエーに出入りする男になっていた。そしてそういうところで働いている女たちの、その裏の生活、つまり私生活を、のぞき見したいつよい好奇心をいだいていたのである。

『放浪記』のなかには、職業的にいえば、そのカフエーの女給の生活が、もっとも多く書かれているのである。当時のぼくは、文学作品をよむというよりは、たぶん、そのカ

フェーの女給というものの、客に見せない生活をのぞき見する思いで、この作品にのみふけたといつてもよいであらう。

(『青春の伝記』林芙美子 昭2・9 鶴書房)

しかし、ここで注意したいのは、たとえ読者が職業婦人の遍歴をたどることに好奇心を傾けて『放浪記』を読み進めていったとしても、その好奇心は次第に文学的感動の類へ変質して行くに相違ないということである。もし、そうでないならば今日もお多くの読者を獲得することはないであらう。一言でいえば、〈私〉の生長し続ける姿に魅了されるのだと考える。言いかえれば、〈私〉が遍歴の過程において出会う人間達との心のふれあいが読者の胸をうつつのである。自分よりもさらに恵まれない生活を送る人間を知る彼女は、我身の甘えをさとされ、生きる希望を授けられる。それが次第に蓄積して彼女は生長する。

たとえばたった二円で雇用先から追い出されて木賃宿に一泊したあと、朝食のために訪れた飯店のこと。職をさがさねばならぬ彼女は絶望状態にある。そこへやって来たある労働者はたった十銭しかないからそれで何か食わせてくれという。しかもその様子はいたって朗かなのだ。十二銭の朝食をすませた〈私〉は考える——あの四十近い労働者の事を思うと、これは又、十銭玉一ツで、失望、どんぞこ、墜落との紙一重なのではないだろうか——。

(第一章)——と。

また、〈私〉達はいつまでもこんな馬鹿な生き方をしなければならぬのだからか? いつまでたつてもセルロイドの匂いに、セルロイドの生活だ。と考へながら女工を続ける〈私〉だが、〈お父つあんが寄席の三味線ひきで、妹弟六人の裏家住い〉の女工の存在を知る。その女工はまた美貌なのだが、彼女がなりふりかまわず懸命に働く姿をみる〈私〉は、〈街の華やかな一切のものに、(私は)火をつけてやりたいようなコーフンを感じてくる〉のである(三

章)。

さらに、落ちるところまで落ちたと思つて働いているカフェーの女給時代に、仲間の女給が世間一般の女たちよりはるかに親切で思いやりがあることを知る。初めはどんなに用心し合つても何かのきっかけですぐ姉妹以上の関係になることを知る。〈弱い私……私はツバを引つけてやるべき〉と自省するのも結核の夫と赤子を置いて女給をする仲間の存在を知つたからである(九章)。

以上のような例で示されるが、全く底辺の人間の心の琴線にふれえた〈私〉は、理論よりも生活を優先させる生き方を会得することになる。

### 第三章 なぜ読まれたか——奔放な性表現——

食物を何とか確保しようと悪戦苦闘する〈私〉の生活は同時に、男性問題を絡ませて進行する。作品では早くも第二章でかわりのあつた〈島の男〉が登場するが、その後仕立屋の二階に同じく間借りする印刷工の松田にやさしいふるまいをされると、〈今までこんなに、優しい言葉を掛けて私を慰めてくれた男が一人でもあつたらどうか、皆な私を働かせて煙のように捨ててしまったではないか〉と述べて、それ以前にも数人の男と交渉があつたことを示唆する。

五章では〈私〉は男優と同棲している。しかし、男に若い女優の愛人がいるとしてまもなく別れる。六章はその後日談を紹介しながら、同時に別れたあとの寂しさから画学生の吉田と結ばれる下りが描写される。さらに七章では〈夫〉との結婚生活が語られるが、続く八章ではまた独身に戻る。九、十、十一章とそれは続く。十三章になると文学者の夫と生活していることになっているが、五章同様、男に女ができて、ショックを受ける。この十二章と七

章の夫が同一人物かは第一部を読む限りでは不明である。十四、五章はその後日談。

このように、作品には多数の男性との交際が叙述されているが、根本的に彼女は寂しがり屋である。しかも、性的にアナーキーな傾向を備えている。たとえば、へああ情熱の毛虫、私は一人の男の血を私たちのように吸いつくしてみたいような気がする。男の肌は寒くなると蒲団のように恋しくなるものだのだ (十一章「一人旅」といとも簡単に言つてのけ、へあの白い生毛のあるお糸さんの美しい手にふれていたい気がする。私はすっかり男になりきつた気持ちで、赤い長襦袢を着たお糸さんを愛していた。へあ、私が男だったら世界中の女を愛してやつたらうに……) (十二章「古剣」と表現できるのが彼女なのだ。

しかし、性的に奔放なようで、何人もの男と交際しながら遠くに去つた初恋の男をを時折、憶い出す一面も備えている(二章「淫売婦と飯屋」八章「雷雨」、十一章「一人旅」)。

彼女のように男性体験が豊富な女性は商売女は別として、当時そんなになくなくたつたのではないか。もちろんへ私が林芙美子であると仮定しての論だが、アナーキズム、ダダイズム系の詩人たちと交際していた彼女がその詩の表現のように、男女の仲においても自由奔放であつたことは年譜の上からも指摘できる。しかし、たとえそうであつたとしても、一方に初恋の男を忘れないでいること、また一方にカフェの女給という身の上をへまるでアヘンでも吸つているようにずるずるとこの仕事に溺れて行く事が悲しいへ八章と自覚していること、さらに、そういう境遇においてへ物を書き、読む楽しみをを持続したこと等々、へ清濁あわわせ呑むような存在にへ私は設定されている。

彼女のような存在と、その魅力がまた読者にとつては同時に『放浪記』の魅力でもあつたと考えられる。それはへ男に放浪し、職業

に放浪する私へ (十三章「女の吸殻」)の半生を描きながら、放浪を売り物にするたんなるルンペン文学に墮すことなく、放浪に叙情が加味されて、みごとな青春文学になりえているといふことである。

#### 第四章 なぜ読まれたか——故郷と母——

たとえば十一章は女給仲間のお君さんと横浜の海を見たあと、一人で旅に出る場面だが、そこでへ私は次のように言う。

(やっぱり旅はいい、へあの濁つた都会の片隅で疲れてたいるより、こんなにさっぱりした海の上で自由にのびのび息を吸える事は、ああやっぱり生きてる事もいいものだと思う。

また十四章「秋の脣」でも、房総の旅へ出てへたとえ小さな旅でも、二日の外房州のある寥々たる風景は、私の魂も体も汚れのとれた美しいものにしてくれたした。(旅はいい、へ)と述べる。このように東京での生活に疲れて悲観的になつた時に彼女は命の充電の旅をする。その旅は十一章の場合では故郷への旅であり、十四章では他所への旅行である。しかし、前者の場合、第一章でへ私は古里を持たないへ旅が古里であると述べていたのだから、へ私はにとつての故郷とは、実は母の住む場所をさす。『放浪記』では義理の間柄のせいか父の影は薄く、母との関係がはるかに濃厚に描かれる。前述したように再刊本でへ母とと記されているのは初刊本で殆んどへお母さんとであつた。この事実もへ私ととへ母ととの関係の深さを示すと考えられる。以下、母に関係する記述を摘記しようへ内が原文より引用)

(1) たどたどしいカナ文字の手紙をよこし、へ五十銭でもいいから送つてくれという母親へ (四章)。

(2) 夫にじゃけんにされると、青空を見上げながらへああ全世界はお父さんとお母さんでいっぱいなんだ。お父さんとお母

さんの愛情が唯一のものであると云う事を、私は生活にかまけて忘れておりました(七章)。

(3) 女給部屋で何もかも厭になつて涙をすすりながらへお母アさん/お母アさん/と叫ぶ彼女(八章)。

(4) 淫売まがいのことを誘惑されかかるとへどうせ故郷もない私、だが一人の母のことを思うと切なくなる(八章)。

(5) もらいが少したまると、母親への手紙の中にはさむ——(隣の本屋で銀貨を一円札に替えてもらつて田舎へ出す手紙の中に入れておいた。喜ぶだろう(と思う)(九章)。

(6) 身体具合が悪いと心配して——へ老いて金もなく頼る者もない事は、どんなに悲惨な事だろう。可愛想なお母さん、ちつとも金を無心して下さらないので余計どうしていらつしやるかと心配しています(九章)。

(7) 久しぶりの帰郷——へ親子はいいものだと思ふ。こだわりのない気安さで母の顔多しわを見た。鼠の多い煤けた天井の下に、又母を置いて去るのは、いじらしく可愛想になつてしまふ(十一章)。

(8) 絶望状態になるとへチュウインガムを噛むより味気ない世の中、何もかもが吸殻のようになってしまった。貯金でもして久し振りに母お母さんの顔でもみてようかしら(と思う)(十三章)

(9) へ一生たつたとて、(いつたい何時の日には)私が何千円、何百円、何十円、たった一人のお母さんに送つてあげる事が出来る(の)だろうか(……)(十三章)。

(10) へ透徹した青空に、お母さんの情熱が一本の電線となつて、早く帰つておいでと(私を)呼んでいる。私は不幸な娘でございます(十三章)

(11) へ可愛想なお母さんは四国の海辺で、朝も夜も私の事を考へて暮しているのだ(十四章)。

(12) へこうして一人になつて、こんな荒れたさんだカフエーの二階で手紙を書いていると、一番胸に来るのは、老いた母のことばかりで。私がどうにかなるまで死なないで(いて)下さい(十四章)。

(13) へ留守中、母お母さんから、さらしの襦袢(が)二枚送つて来ていた(十四章)。

作品において「私」は一人娘ということだから、親は子のことを考え、子は親のことを考えるのは当然かもしれない(逆に、そのために一人娘に設定したとも考えられる)。従つて、遠く離れて暮してもお互の身の上を心配する。母は金の無心をしながら若干でも余裕があると娘に送り物をする。それは時に鼻の薬であつたりする。また、娘も母の胸に飛び込みたい気持ちを抑えつつ打ちひしがれた生活を送り、余裕が生じると、送金してあげる。

以上の引用例から、このような親想いの子、子想いの親という親子像は歴然とする。しかし、これらを分析してみると、いくつかのパターンに類別できるようである。たとへば、(2)(3)(4)(8)は都会にあつて自立をめざそうとする「私」が貧窮生活にうちひしがれそうになると、母を精神的支柱とするケースであり、(5)(6)はいずれ自立できて恩返しをする場合で想定してのまねごとと観ることが出来る。さらに、(9)(12)は将来の自立への願望を表わし、(1)と(13)は矛盾するような表現だが、母親の特殊性がうかがえる場合といえよう。

これら諸ケースに特殊な例はあるにしても、このような母子関係は日本人としてはごく一般的な型である。そのことをたとへば山村賢明氏の『日本人と母』(昭46・3東洋館出版)は教えてくれる。

母は日本人の精神のおくふかくにあつて、彼の行為をままもり、個人的な不幸や公私にわたる困難な状況にたいしては、それを切り抜けてゆく心の支えとなり、時には救済となり、

彼はそれとの対話によってはげまされるような、そういう「何ものか」なのだ。

少なくとも明治以降に限っても〈母物〉と呼ばれる小説や演劇、講談、落語、歌謡曲その他諸種ジャンルの作品が発表されて来た。なぜあきもせずそれが日本人に受け入れられているのか、日本人の心情とどのようなかわりがあるのか、それは興味深いテーマなのだが（一例として石子順造氏に『子守唄はなぜ哀しいか・近代日本の母像』昭51・4講談社の考察がある）、この『放浪記』も〈母物〉と判断が可能なほど母子像が鮮明に描かれている。この作品が日本人にとって普遍的テーマともいえるべき〈母物的側面を色濃く備えていること、そこに多くの読者の共感を呼んで来た一つの理由があるように考へる。

ところで、『放浪記』において母子が生活を共にするのは一章は別として三章「裸になつて」しかない。〈私〉は故郷に母を置いて、東京で自立を夢みて生活しているのだ。神島二郎氏の考察によれば、日本の近代都市は自然村の経済的基礎を掘りくずされた農民の離村の結果によって発展した。しかし、その都市はゲゼルシャフトではなく、〈群化社会〉である。都会には自然村にはない競争の自由があつたが、反面、孤立と焦燥と疲れとが生活の基底に滞留せざるをえない。彼らは〈家〉や〈村〉や〈郷土〉を永遠のやすらいとし、郷愁を感じながらそういう生活を送る（『近代日本の精神構造』昭36・2 岩波書店）。昭和七年に合併して三十五区となつた東京市は人口が五百万人ほどだったが、その半分は地方出身者であつたと思われる。その地方出身者にとつて『放浪記』の〈私〉の気持ちは正に私事のように思われたに相違ない。特に本人が上京第一世代である場合はそうだろう。作品に〈旅の古里ゆえ、別に錦を飾って帰る必要もないのだつたが〉（第十一章とあるのは、以上のようなことの裏返し表現である。

このように〈私〉→都会→母→故郷、という図式がこの作品においてみごとに成立し、それが近代以降の日本においてきわめて基本的なパターンであるだけに多数の読者をひきつける一つの要因となつたと考へられる。

## 第五章 なぜ読まれたか——文章の魅力——

今までなぜ読まれたか、その理由の若干を考察してきた。他にも二、三挙げられる。作中に食物の名前や価格がしばしば記述され、そのことが読者にとっては具体的で、親しみを感じさせる。また、〈私〉は作中で〈芙美〉と記されているため、読者は作者と同一視して読み進む。日記体ということも加担し、一種ののぞき趣味（好奇心）が働くわけで、読者は頁を次々とめくることにならる。

さらに、以上の内容と深くかわる文章の魅力がある。文章の特色を把握するためにまず当時、『放浪記』がどのような印象で読まれたかを紹介しよう。前記したように古谷綱武は当時成城高校を中退し、仲間と共に『白痴群』を刊行するなど（昭4・4）、新しい文学の創造に志していた。新刊の『放浪記』を読む彼は次のような一節に出合う。

どこへ行っても砂原のように寥々とした思いをするので、私は胸がつまつた。  
（お前さんに使ってもらうんじゃないよ。）

おたんちん！

ひよつとこ！

馬鹿野郎！

（第二章）

こんなに卑語をそのまま投げつけるように書く文章を彼は文学とは思えなかつた。まるで落書きのような書きなぐりと思ひ

なかった。当初、若い女の生活をのぞき見る思いから作品のあちこちを開いては読みふける彼は、次第に一人の若い女が生きているということを考えさせる作品内容に魅かれて、くり返し読む。林芙美子より五歳下ではあるが、ほぼ同時期に文学的出発を持った古谷は後年の著書『青春の伝記』林芙美子（前記）でこのように回想している。

古谷を含む『白痴群』の同人たちはむろん、当時の文学青年たちが志向していた新文学とはヨーロッパ二十世紀のモダニズム文学であった。昭和三年九月に創刊された『詩と詩論』ではヴァレリイやジイドが紹介され、『文学』（昭4・10創刊）によってプルウストが、『詩・現実』（昭5・6創刊）によってジョイスが、という具合にいわゆる新心理主義文学が新感覚派文学の後をついで昭和文学の一方の主流となりつつあった。例を横光利一にとれば、『上海』（昭3・11）『改造』が新感覚派文学の集大成を意味し、『機械』（昭5・9『改造』）が新心理主義文学の出版を記念する作品として著名である。文章の一例をあげよう。

○ 満潮になると河は膨れて逆流した。火を消して蝟集してゐるモーターボートの首の波。蛇の竝列。抛り出された揚げ荷の山。鎖で縛られた棧橋の黒い足。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていつた。海関の尖塔が夜霧の中で煙り出した（『上海』）。

○ 私は屋敷の弁解が出鱈目だとは分つてゐたが殴る軽部の掌の音があまり激しいのもう殴るだけはやめるが良いと云ふと、軽部は急に私の方を振り返つて、それでは二人は共謀かと云ふ。だいたい共謀かどうか云ふことは考へれば分るではないかと私は云はうとしてふと考へると、なるほどこれは共謀だと思はれないことはないばかりでなくひよつとすると事實は共謀でなくとも共謀と同じ行為であることに気がつ

いた（『機械』）。

この横光の例にてらしても明らかだが、『放浪記』の文章は当時の先端に位置するものとは全く異質であった。荒々しく、むき出しのタッチで作品が進行する。モダニズム文学の立場に立てば、それは落書きのような書きなぐりと判断されても致し方ない。しかし、新感覚派文学の文章がある歳月を隔てると、当時新鮮だったがゆえに古びてみえる部分が多いのに対して、『放浪記』のような文章がなお新鮮さを保っているのも事実である。一体、その秘密はどこにあるのだろうか。

先の古谷綱武氏は始めて『放浪記』を読んだ際の文学的感銘について作品全体に流れている豊かな詩情の魅力を挙げた。また、草部和子氏は「宮本百合子・林芙美子の文体」（昭35・4『国文学』）の中で、『放浪記』が抒情やユーモア・詠嘆・ナルシズムなどミックスされた散文詩的な作品であり、芙美子の詩情が手法の上に直接的に生かされた成功作だと述べ、個性的な現象描写とそこから引き出される詩的感受性の深化、それによる次の現象描写への飛躍——といったリズムミカルな連鎖反応のなかに文体の特色があると説いた。

さらに、原子朗氏は「林芙美子」（昭44・1『国文学』臨増）において、〈句切れが短かい〉等十項目に及ぶ文章形式の特徴を指摘したあと、『放浪記』の文体はむしろ日付けと日付け、断片と断片の間にある。それは日本人のもつ様式Ⅱ文体の現代的な典型ともいえる」と述べた。

これら諸論考をふまえて以下考察を加えたい。前提として先にふれたように『放浪記』は初刊本をテキストに採る（草部氏や原氏の場合は再刊本に拠っているが、初刊本に拠ると認識も改たになると思われる）。

先に紹介したように古谷綱武は若い女が生きているということ考

えさせる内容に魅かれたという。若い女が生きては、先にみたように様々な職業を遍歴して食うや食わずの、あるいは性の誘惑と闘いながらの生活をすごすことであつた。そういう生活を描く文章は何よりも平明でなければならぬだろう。彼女らにはヴァレリーもジョイスも必要でない。観念的な言葉は不用なのである。初刊本をみると、行変えが甚しく、一センテンスが短かいことに気づく。これは文章が平易であることと条件となりうる。漢字が少なく、カタカナ書きが多いのは芙美子が意識的に平明を心がけた結果であつた（『私の地平線』昭6・6後『文泉堂版全集十六巻』所収）。オノマトペが頻用されているのも具象名詞の多用も、直喩が続出するのも、いずれも内容を読者に身近かに感じさせる効果をあげている。

草部氏の指摘されるように、文章にある種のリズムがある。しかし、同時にそのリズムを破壊するような言い方をまじえる。それが実に効果的なのである。たとえば初刊本の三章の一節に、

五月×日

かしまはあんまり汚ない家なので、まだ誰も来ない。

お母さんは八百屋が借してくれたと云つて大きなキヤベツを買つて来た。キヤベツを見ると、フクフクと湯気の立つ豚カツでもかぶりつきたくないな。

がらんとした部屋の中で、寝ころんで天井を見てみると、鼠のやうに、小さくなつて、色んなものを食ひ破つて歩いたらユカイだらうと思つた。

とあるが、この場合の「かぶりつきたくないな」という表現はたとえば、「かぶりつきたいと思ふ」とか「食べたくなつた」とでもあるべきところだ。しかし、「かぶりつきたくないな」と口語的表現をとることによって、それまでの「へー来ない」、「へー来た」と続いた文章語の文末リズムが崩れてしまう。もっともそのことによつて

キヤベツからトンカツが連想され、そのトンカツを食べたいという気持ちはストレートに伝わってくるのだが。因みに、再刊本では「かぶりつきたいと思う」と直されている。

また、四章にこんな描写がある。

一日働いて米が二升切れて平均六拾銭、又前のやうにカフェーに逆もどりしようか、あまたたび、水をくぐつて、私と一緒に疲れきつた壁の銘仙の着物を見てみると、味気なくなる。

ハイハイ私は、お芙美さんは、ルンペンプロレタリアで御座候だ。何も無い。

何も御座無く候だ。

この場合、「味気なくなる」までの部分は「私」のかなり悲痛な心境を描く。それに対して「ハイハイ」以下はそういう「私」を自嘲した言い方をしており、ここを読む諸者はそれ以前の「私」の心境に同化することを防止される。この例のような仕組みの文章が『放浪記』初刊本にはいくらかもあり、結果的には飢え寸前の生活を描きながら悲惨な印象を強く与えられないのである。

以上、二、三の例からも判明するように『放浪記』の文章はユニークなものである。しかし、この散文詩的文章の特色については今後も調査を続けて行く必要がある、今回は問題提出の段階にとどまつた。

☆ ☆ ☆

『放浪記』はよく言われることだが、林芙美子の文学の源泉とみてよい。それほど後の文学の栄養素がこの中には詰まっている。これに続く傑作として「清貧の書」（昭6・11「改造」）が挙げられるが、これとて素材は『放浪記』中にある。その後「清貧の書」の

系譜にあるものとして「小区」(昭7・11『中央公論』)「魚の序文」(昭8・4『文芸春秋』)「牝鷄」(昭10・5『改造』)等があるが、『放浪記』につながることはいうまでもない。「牡蠣」(昭10・9『中央公論』)に至ってようやく独自の世界が形成され出し、『浮雲』(昭26・4刊)に辿りつく道のりが見え始めたといえるだろう。しかし、この「牡蠣」にしる要となる男女観などは『放浪記』にその基本線が敷かれていた。<sup>注(5)</sup>そうしてみると『放浪記』の芙美子文学に占める位置は絶対的ということになる。小稿はできるだけ多角的に『放浪記』を論じようと試みたのだが、大方の御批判をいただければ幸いである。

注(1) 書誌的記述が誤まっている例として『日本近代文学大事典』第三巻(昭52・11講談社刊)所収の「林芙美子」(執筆・野口富士男)や『新版 放浪記』(昭54・9新潮文庫)の「解説」(執筆・小田切秀雄)等がある。本文の異同に配慮した例としては管見では『鑑賞と研究・現代日本文学講座・小説7』(昭37・2三省堂刊)の「林芙美子」(執筆・熊坂敦子)ぐらいのもので、他は無視ないし軽視している。

注(2) このことについては小稿『放浪記』の比較文学的研究―ハムスン『飢え』と『伊勢物語』―(『秋田近代文芸史研究』4号、昭58・8)で述べた。

注(3) 新宿の変遷と『放浪記』を結びつけた論考に海野弘氏の「日本一九二〇年代」(林芙美子『放浪記』(昭57・8『海』)がある。

注(4) 『放浪記』にへいつたい革命とは、どこを吹いている風なのだ……中々うまい言葉を沢山知っている日本の自由主義者よ。日本の社会主義者は、(いったいどんな)お伽噺を空想しているのでしょうか? (第四章「目標を消す」とあるのは、早くもそのことの芽生えとみてよいだろう。

注(5) この辺の問題については小稿「林芙美子『山榎』の位置」(『金沢大学語学・文学研究』十二号昭58・3)で述べた。

(昭和五十八年九月八日受理)